

発達障害

一般に、障害には、生物学障害、能力障害と社会障害の3段階があります。発達障害は、社会障害、福祉や教育支援により社会生活の困難が軽減される状態として対応します。発達障害の生物学障害には神経ネットワーク接続の問題がありますが、個々の子どもで原因が明らかになることはほとんどありません。発達障害の一部は、生物学障害として薬物投与が考慮される場合もあります。発達障害者支援法では、行動の特徴から、自閉症スペクトラム障害、注意欠如／多動性障害、学習障害と、その他の障害を定義しています。それぞれの特徴を併せ持つ子どももいます。社会障害として、集団活動が困難、指示が入りにくい、コミュニケーションが制限される、独自の活動が優先し孤立しがちであるなどがあります。この結果、仲間や権威と対立し攻撃的になったり、行動に自信が持てず、自己評価や自尊心は低下し不安やうつ状態になったりすることも少なくありません。こうなる前に適切に支援していくことが求められています。

神経ネットワーク接続不全のために、乳児期には、社会コミュニケーション行動や愛着行動がほとんどみられません。社会コミュニケーション行動には、コミュニケーションのために視線を合わせる、ジェスチャーを使用する、物や発声のやりとりする、興味や感情を共有するための指さしをするなどがあります。愛着行動には、後追いをする、抱かれようとして手を出すなどがあります。この神経ネットワークの機能不全は、やがて出現する子どもが他人の行動を真似したり、他人から言葉を学んだりする行動を可能にする神経ネットワークの出現にも影響します。このため、乳児期の社会コミュニケーション行動を標的とする行動療法による早期介入は、この神経ネットワークの機能強化を目標としています。

生物学障害は生涯変わりませんが、行動を自ら適応させられれば、福祉や教育の支援は必要なく、生物学障害は特性や個性と言い換えることはできるかもしれません。しかしながら、人生のどの時点でも環境が変わり行動を変える余裕がなくなれば、社会障害を復活させ十分な支援を考慮することは大切です。このため、周囲は当然として、本人も自身の特徴を受容する必要もあります。特徴を知らせるのは、社会に適応して、自身の行動に自信が持てるようになる思春期頃が適切と思われる。生物学障害の根本的な原因は遺伝子変化です。遺伝子変化は家族内で共有する場合があります。遺伝子変化は神経ネットワークに直接影響しますが、行動への影響は少ないかもしれません。時に親子で、あるいは兄弟で発達特性が似ているのはこのためです。